

彙報

小牧敬授辭任

本學地理學教室の主任たる小牧實繁教授は終戦後その進退に就いて考慮中であつたが去十一月廿日一身上の都合を理由に辭表を提出して十二月廿七日附で退任せられた。教授は昭和十二年八月『先史地理學研究』の論文を提出して文學博士の學位を得、同十三年三月教授に任官、石橋教授の後を承けて史學地理學第二講座を擔當し、戦時中は特に日本地政學を提唱して活躍する所があられたのである。

復員學生專攻決定

專攻科目決定以前に入營入團等に依つて軍務に服してゐた史學科學生中復員に伴ひ十二月十二日までに專攻を決定したものは次の如くである。

國史科	八名
東洋史料科	二名
西洋史料科	二名
地理學科	一名

なほ従來專攻の決定してゐた復員學生中地理科並に國史科各一名宛の西洋史料への轉科が認められた。

國史研究室近況

見學 十二月八日(土)に西田教授・東伏見講師等指導の下に奈良西の京の見學を行つた。一行約四十名先づ秋篠寺に詣り、草創伽藍の舊址を探り、鎌倉の修補を加へた本堂(舊講堂)の建築を調査し、堂内に安置する本尊藥師三尊をはじめ諸佛像を拜觀した。就中技藝天と傳へる一像は頭部は奈良時代の乾漆に、體軀は鎌倉時代の木彫を以つて補修して頗る逸品である。次いで佐紀の山邊に諸陵を巡拜して平城の故都の迹を訪ね、大内裏、大極殿、朝堂の址を指呼の間に展望して、京址研究の事情を聴く。更に東して法華寺に赴き、本尊十一面觀音の婉麗な尊像を拜し、巨大な諸佛頭、海龍王寺の舊本尊等を調査した。それより海龍王寺の西金堂を見て不退寺を訪れた。雄健な板敷殿を持つ四足門を入り、新裝の本堂に本尊聖觀音、五大明王等の尊像を拜し、多寶塔を見學して、薄暮の頃に一應行を解いた。なほ有志の者は更に興福院尼寺を訪ねた。

西洋史讀書會

昭和二十年度第三回例会 十二月十五日午後一時より西洋史研究室にて開催した。出席者は原教授・井上助教授以下十三名。

一、ミルトンのアレオバギチカ

星田輝夫君

考古學教室近況

伊賀美波多古墳群調査 考古學專攻學生の實習を兼ねて十二月八日(土)に上記の調査を行ふた。梅原教授・小林助手以下學生七名はこの日朝八時三分の奈良電にて出發、十一時前現地に到着の上、直ちに最も大きい馬塚より略測量を開始して十二時半終了。同地國民學校で一汁一菜と甘藷のもてなしを受けて中食の後、引續いて女郎塚・毘沙門塚・殿塚の三前方後同墳をばそれ〴〵測定して個々の墳形の違ひを明にすることが出來た。薄暮終了美旌驛で解散した。この行村治圓治郎氏が東道の任に當り上記國民學校なり近畿日本鐵道會社から援助を與へられたので短時間でよく豫定の調査を終るを得たのは感謝すべきである。

なほ梅原教授と樋口副手とはこの夜上野市に一滴の上翌九日(日)更に村治氏の案内で名賀郡名張町夏見の塔佛出土の廢寺跡を踏査し、種々の興味ある資料を得たのであつた。

大學院學生特別研究會 十二月六日(木)午後一時からその第一回を教室で開いた。出席者十名。この日は特に東伏見講師の出席を請ふて歴史考古學殊に飛鳥奈良朝文物の研究問題を中心として活潑な意見の交換が行はれ、梅原教授からそれに就いては隋唐文物に關する知見の必要な點を強調せられた。

考古學談話會 十二月廿日(木)午後一時半から本年最終の會を考古學教室で開く。梅原教授・村田講師以下出席者十四名。席上昭和十七年以來滿三年間朝鮮扶餘に於ける百濟遺跡の調査に従ひ最近引き上げた藤澤一夫氏を聘して同地の古瓦・古寺跡に就いての調査談を聽いた。同氏は先づ扶餘發見の軒瓦瓦はこれ

を大別すると四つに分たれることを説明して後、その一たる複瓣の瓦は百濟時代には存しなかつたこと、主要な單瓣蓮花文瓦當に見るや、著しい二類の前後をば寺跡に於ける伴出の平瓦に見る押型の千支の文字や、寺の沿革などから考定して、右の見地から輕部慈恩氏の扶餘に先立つ公州に於ける軒瓦瓦なるもの、疑ふ可き點を明にした。而して寺跡に就いては扶蘇山城腹、平百濟塔を中心とする寺跡並に金華山南麓等の寺跡の調査の經過並に實際を詳しく解説して、單に同地のみならず我が初期佛教遺跡の研究上にも示唆する所があつた。

京都に於ける二種の史學關係雜誌刊行の計畫

職局の緊迫化に伴ひ各種の學術雜誌が著しい遅刻乃至休刊のやむなきに至りその事情は終戦後もなほ著しく改善を見ない實狀にあるが、幸に戦災を免れた京都に於いて、別に新たな史學關係の二つの學術雜誌の新刊行が計畫せられ着々實現の歩を進めつゝあるのは欣ぶ可きである。その一つは本學園史料出身の中堅有志を以て組織せられた日本史研究會からする季刊雜誌『日本史研究』の發刊であり、他は考古學教室の外部團體を基礎とする『東洋考古學』の創刊である。

前者は終戦を契機として要請せられてゐる眞摯にして自由な日本史の學問的研究を目的としたものであつて、その同人は戦時中『中世文化史研究』を編纂して眞面目な學的成果を世に示した人達であり、雜誌の刊行の外に研究の會合、調査などをも實施す

ると云ふ。いまその會則と近く出る第一號の要目を得たので次に掲げてその健全なる發達を期待する。

日本史研究會々則

- 一、本會の目的は日本史並に之に關する諸問題の眞實にして自由なる學問的研究を行ふにあり
- 一、本會は右の目的達成のために會合(毎月一回)並びに調査を實施し、會誌其他の刊行物を發行す
- 一、本會は目的を同じくせる凡ゆる他の諸團體との協力をなすものとす

- 一、本會の趣旨に賛し會費年廿圓を課出するものを會員とす
- 一、本會の會務は會員中より選出せる委員合議して之を擔當す

但し委員の任期は一年とし重任を妨げず

- 一、本會に入會を希望するものは、住所姓名職務を記載して、本會事務所(京都市左京區北白川追分町一秋田屋編輯部)に申込まるべし

- 一、本會々員は會合調査に参加し會誌の頒布を受け、これに研究を發表することを得

創立委員(五十音順)

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 櫻井 景雄 | 柴田 實 | 清水 三男 | 田井 啓吾 |
| 高瀬 重雄 | 内藤 晃 | 林屋辰三郎 | 藤岡謙二郎 |
| 藤谷 俊雄 | 前田 一良 | 村山 修一 | 毛利 久 |
| 森 暢 | | | |

日本史研究 第一卷第一號目次

(四六倍版一八二頁 昭和二十一年一月創刊)

研究

- | | |
|---------------|-------|
| 近世の農政思想 | 清水 三男 |
| 山鹿素行論究 | 内藤 晃 |
| 日本紀年の科學的研究(上) | 藤谷 俊雄 |
| 日本文化の神祕的性格 | 村山 修一 |
| 主として社寺緣起を通じて | |

論說

- | | |
|------------|-------|
| 調和(歴史的真實) | 原 隨園 |
| 景觀變遷史の性格覺書 | 藤岡謙二郎 |
| 歴史學徒の再出發 | 藤谷 俊雄 |
| 國史教育の方向 | 前田 一良 |

資料

- | | |
|---------------|-------|
| 平安京坊門考 | 川勝政太郎 |
| 吉野時代の法隆寺と東西兩郷 | 林屋辰三郎 |
| 講座 近代政治思想史 | 高瀬 重雄 |
| 第一講 幕末の政治思想 | |

批判 彙報 等

次に『東洋考古學』は從來『研究報告』『研究資料叢刊』を刊行して内部の充實を示して來た考古學教室の同人が更に時勢の要望に應じて廣く一般の考古學研究を促進すべく計畫せられたものであつて、教室員の業蹟の發表に兼ねて他のすぐれた研究をも收録

することを期した。梅原博士が編纂の責に任じ、年四回(但し明年は二回)で星野書店がその刊行に當ることになつて居る。第一冊は来る七八月の交出版の豫定で着々準備が進められつゝあるのである。

會報

評議員會

十二月十七日(月)午後一時より文學部陳列館貴賓室にて開催、西田・原・梅原・宮崎・井上・藤の諸評議員、藤原庶務會計擔當委員出席、先づ西田評議員・藤原委員より過去一ケ年間に於ける會務の報告があり、ついで梅原評議員より『史林』發行狀態に就いての説明があつて後左の諸事項を決定して二時半散會した。

一、終戦に伴ひ星野敬一氏が再び書店を經營して出版に當ることになつたので會誌『史林』の發行を同書店に委託する件

一、役員の変更 庶務會計の擔任として西田評議員に代つて新たに梅原評議員がその任に就き、編集主任には宮崎評議員之に當り、なほ各科の編纂擔任は井上・藤・梅原の三評議員(地理學は未定)に依頼すること。

一、缺員中の考古學の編纂委員として新たに文學士樋口隆康氏を依頼、更に藤原委員に代つて庶務會計の事務をも依頼すること。

一、宮下信亮氏よりの寄附金受領の件

一、印刷費其他の暴騰に伴ふ臨時の處置として當分のうち會費の外に會員より雜誌代の超過額の支拂を求めること。

本紙發行所の變更

戦時中出版統制法に依り『史林』の發行は本會の直接經營の下に置き星野敬一氏にその事務を囑托してゐたが、終戦に伴ひ、星野書店が出版の業務を開始することになつたので事務の輕便を期する見地から前記評議員會の決議に依つて、その發行を舉げて同書店に依頼することにした。

一 寄附金受領

去る十一月十八日南禪寺で開催した本會の小會にたま／＼出席せられた浦和市の宮下信亮氏は會の事業に賛して金一千圓の寄附を申し出られた。依つて評議員會の議を経てこれを受領の上、會の目的達成、殊に研究論文發表の費用に當てゝその厚意に副ふことにした。

會員動靜

死 亡

左の會員諸氏が逝去せられた。こゝに弔意を表する

文學士	有 働 賢 造
文學士	向 居 淳 郎
	葛 城 末 治